

## [別紙] 審査請求の理由

長崎県金子前知事が石木ダム事業認定の申請をした時、心ある長崎の市民は驚きと同時に怒りさえ覚えました。それは長崎県が行った諫早干拓とそれに関連した締め切り堤防工事を思い出すからです。この工事の結果、徐々に有明海の生物がいなくなり、漁業者の困窮が続いております。(生活が成立たなくなり自殺者まで出した。)農業への参入者といえば前知事の親族も入植し、県議会でその倫理性が問われております。

そこで我々はダム予定地とはどんなところか?ダムの必要性の利水や治水とは何なのか?原点に帰り、科学的・論理的に検証してみる事にしました。そして最後にダムによる環境破壊に関する我々の見解(治水と環境について)を申し上げます。

### 1. 治水について

石木ダムは利水と治水の多目的ダムです。治水とは、端的に言えば、水害の防止であるが、水害に役に立たない事を2年以上の調査結果、例えば長崎県への情報公開請求や我々の現地調査、により結論を得ましたので簡潔に申し上げます。

- 1) 基本高水流量や計画高水流量ともに算出データや方法が科学的でない。言い換えると100年の一度の大雨も防げるという根拠が見当たらない。更に計画高水流量や基本高水流量が水害防止上どの様な関係になるのか、長崎県の説明でも理解できません。
  - a. ダム計画の大枠のストーリーは、基本高水流量を出し、ダムによる調節量から計画高水流量をきめて、この値以内であれば、洪水は防げる。これが基本であるが、長崎県はそれでも洪水(内水氾濫)地域の河川の改修を優先的に行うと“河川整備計画基本方針および河川整備計画の概要”にうたっている。言い換えると石木ダムでは内水氾濫地域の洪水は防げないと表明しているようなものである。
  - b. 基本高水流量(1400m<sup>3</sup>/S)の根拠
    - \* 貯留関数法にて算出したとの事であるが、その数式も開示できない。
    - \* 川棚の雨量を、長崎气象台及び地元の図書館にデータがあるのに、佐世保の雨量から単純に推定している。(公聴会資料の11~14頁参照)
    - \* 貯留関数法モデルの検証が科学的ではない。その定義も曖昧である。
  - c. 計画高水流量(1130m<sup>3</sup>/S)の根拠
    - \* ダムで調節することに関連し、基準点(山道橋)と石木ダムと野の川ダムの関係は動的解析(Real Time Simulation)を実施しないとはっきりと出ない。何故なら流域の流出時間遅れ、河道での流出時間遅れが異なるからである。
    - \* 1130m<sup>3</sup>/Sの基本高水流量よりも非常に低い値で洪水は発生している。(添付資料-1、公聴会資料の2頁参照)
- 2) 過去の洪水の川棚町の水害の原因究明の分析書さえも作成されていない。(情報開示

請求では保有していないとの開示あり。)

\* この資料があれば石木ダムの必要性が我々は理解できる。

\* 分析書は、山道橋の水位、倉本橋の水位、石木橋の水位、時間雨量  
江川橋の水位、野口川の流れ方向(溢れ方)、川棚川からの越流の地点等を  
記載されたもの。

3) 過去に少雨でも低気圧が来たら川棚町の中心地は浸水被害が出ている。

\* 添付資料 1、公聴会資料の33頁を参照。

4) 川棚町の水害は内水氾濫である。そのメカニズムは次の通りです。

- a. 上流からの雨が山道橋の下流(下流約30m位は海面)に到達すると海面水位の上昇が先ず起こる。
- b. 大村湾を第1のダムとすれば山道橋下流の海面、即ち江川橋付近は第2のダムである。そのように想定できるのは、江川橋も含め4つの橋が河口までに存在する。と同時に大村湾に接する河口の川幅がせまい。狭いという意味は基準点とする山道橋の少し上流の川幅と大差がないという意味もあります。即ち、ここの第2のダムは海に流す河口の断面積と勾配が不足しております。この事を、暗に、長崎県は、“河川整備計画基本方針及び河川整備計画の概要”で認めている。  
税金をダムに投入し、その後に河口域の河川流域に税金を投入しようとしている。
- c. 江川橋付近の海面水位が上昇すると、床上/床下浸水が起こった栄町や中組郷地区の排水が遮断される。排水口の位置を添付公聴会資料に示す。
- d. 川棚町の水害を防ぐには河口域の川幅を広げたり、橋脚による流れ抵抗を軽減したり、あるいは栄町や中組郷の雨量排水が、江川橋の少し上流に注いでいるのを直接海に流す等の対策が採られるべきである。

注・川棚川は長崎県内で2番目の流域面積を持つと同時に山道橋以降の陸地を含め河口域の地形は雨量排水の面で複雑である。JR線の線路が市街地表面より高く、海に直接流す事が出来ない故に内水位氾濫の要因にもなっている。

5) 石木川流域は山林が石木川に近接している為に波佐見地区較べて保水能力は高いし、川棚川本流域の約1/9の流域でしかも本流域との合流点は江川橋に近い観点からも(石木流域の雨量は山道橋まで到達時間が早い。)江川橋付近の最大水位上昇に対する寄与度は小さい。

**治水に関して、要約すれば、国は県の資料を科学的に、精査し、検証し、評価した上で認定したのであるから、ダムで全ての気象条件でも防御できる事を定量的に証明する責務がある。**

## 2. 環境破壊

ここでの環境破壊とは、石木川流域に古来より生息して来た生き物について論じます。長崎県はダム建設計画に対する環境影響評価書（H20年）を作成しております。それに基づき情報開示請求を行ってきました。その結果は現在判明している点につき下記にします。

1) “予測”の定義が不適切であり、認めがたい。その理由はダム建設前での生き物について調査し、ダム建設後に想定される環境要因により、どの種がどれだけの量増減するのかの定量的に評価していない。

\* 情報開示の結果の資料（添付資料 - 1、公聴会資料の48～53頁及び添付資料 - 3の3 / 26頁）を参照

2) 生き物について、生態系なる定義が国交省の定義で評価している。故に我々は不適切と考える。環境庁の評価指針では、「生態系は、ある地域に於ける生物群集と非生物群集環境が相互関係を持ったまとまりの中での物質環境やエネルギー流からなる機能系である。」と規定している。

\* 情報開示請求の結果の資料（添付 3の3 / 26頁）を参照。

3) 古来よりの生き物の1つのゲンジボタルは、最盛期（5月末から6月初旬）にはおおよそ4000匹が、集中的に乱舞する。これがダムにより全滅に近い状況になり、ダム建設後は見られなくなる。

\* 情報開示請求の結果の資料（添付資料 - 2）を参照。

最後に封鎖海域性が強い大村湾沿いの主要なほとんどの川に、8つのダムが出来ており、石木ダムが出来ると、大村湾は生き物が住めなくなると予想する。理由は海水温の上昇による低酸素状態が発生するからである。

#### 添付資料

1. 2013・3・23日の公聴会陳述の為の資料（公聴会資料）
2. ゲンジボタルについての情報公開資料
3. 魚類についての情報公開資料

以 上